

東日本震災で被災された方々にお見舞い申し上げます。
落ち着かない世情の時こそ、普段の事を普通に行いましょう。
今年の盂蘭盆供・施餓鬼法要を左記のように行いますので、よろしくお願
い申し上げます。

施餓鬼会のお知らせ

施餓鬼法要 八月十五日 午後二時～

於 真観寺 本堂

施餓鬼法要の終了後は

各家の施餓鬼供養の卒塔婆をお墓に建立しましょう。

新盆で柵たなきょう行を希望の方はお申し出下さい。

～～～ お知らせ ～～～

東日本大震災当日

三月十一日の東日本大震災では、檀信徒の皆さんにも大小問わず被害があつたと察します。真観寺も灯籠が倒れるなどの被害がありました。地震直後はテレビで放送される津波の様子を見て、「真観寺程度の被害では被害と言えない」と思いました。

重継は建築中の西明寺本堂で電気工事に参加していましたが、久しぶりに来た営業と話をするために、外陣で少し早い三時のお茶にしてみました。本震の揺れが収まった後、西明寺では灯籠が倒れたものの、建物には外見上被害が見あたらなかった。真観寺の様子になり、工事記録写真を撮るためにカメラを持っていたので、携えて真観寺に急ぎました。

上の写真は地震直後、午後三時十分の真観寺の様子です。観音堂前の灯籠が二基倒れています。解りにくいですが、観音堂上の灯籠が倒れているが見えます。





本堂、観音堂、仁王門、客殿の主要な建物は外見上の異常はありませんでした。今回の地震が遠洋型で、建物に多くの被害を与える周波数が少なかったようです。その代わり、「物が落ちる」周波数が多く、灯籠や、上の写真のお地藏様のように固定が充分でない物は落ちました。「小見」の由来は「おおみず」が由来で、一見、洪水の多い地名のように見えますが、実は扇状地の中で、水が湧く場所に「小見」の地名が付きます。「洪水」という意味で水が出るところは「また」とか「あい」という地名になります。思うよりは地盤が良い場所のようです。そうでなければ、古墳が築造できなかったと思います。

市内の多くの場所で崩れた大谷石の塀は被害が出ました。左の二枚の写真の様に、仁王門の南側で塀が二カ所で崩落しました。割れてしまった物は処分しましたが、弘法大師御遠忌千二百五十年を記念して喜捨により作られた塀なので、使える材料は土留め等に再利用することを世話人会議で決めました。

塀が崩れることで人的被害が無かったのは幸いです。後日、西側墓地の南の塀もずれていることが判明しました。



被害のまとめ

今回の震災で受けた被害を四月十三日の世話人会議で報告しました。

倒壊

大型灯籠3基、小型灯籠2基、石地藏菩薩二体

仁王門前の大谷石塀、西墓地南側の大谷石塀の一部

目地切れ

大型灯籠4基

壁の損傷 本堂内陣左右の壁のひび割れと剥落

昔の台所の瓦屋根が崩落

灯籠二基が倒れただけの白川戸西明寺より被害が大きく、正直言つて「困った」のですが、後日見聞した近隣寺院に比べて寺院としては規模が大きく、建物が古い割には建物の被害が少なく、驚いています。

被害が少ない理由は二つ考えられます。

曾祖父井桁浄眼が関東震災で傾いた長久寺本堂の傾斜復元に非常に苦労しました。自身も関東震災を経験し、師匠の苦労を間近で見ていた一番弟子の中村喜継と次女の杏奴子（祖父母）は、理屈は解らなくても「屋根は軽い方が良い」と判断し、六十年間一貫して仁王門（昭和二十六年）、観音堂（昭和五十二年）本堂（昭和六十三年）の改修の際に銅板屋根化に取り組んできました。その流れを継いで中村俊継も仁王門解体修理（平成十三年）と客殿建設（平成十六年）の工事で屋根を銅板葺きとし、屋根を軽量としました。

勿論、祖父は数学と物理がまるで解らない。父は多少数学と物理が達者でも数学の教育が悪かった時代の事、「デルタ関数を全区間で積分するとなくに」という、振動解析のツボが解っていない面がありました。それでも二代に亘って眞観寺の屋根は軽量化してきました。

この流れは「瓦屋根は修理交換可能な屋根材としては優れているが、屋根の重量にメリットはない」と判断し、西明寺

本堂を軽量屋根で作った重継まで受け継がれています。これらは関東大震災という、九十年前の過去の厳しい



この様な形の
璽瑠が切れて…



バランスを崩した天蓋が天井に激突！
（眞観寺の天蓋は無事でした）

教訓を頑固に現代に生かした一つの例です。これらは引き寄せた幸運だと思えます。

また、幸運にも恵まれました。他寺院が大きく被害を受けた本堂天井の瓔珞ようらくが挙げられます。

瓔珞の一つが昨年十二月十二日に突然経年劣化で切れました。「一カ所切れれば全ての経年劣化を疑う」という原則に基づき、瓔珞は全て外され、全て新潟で修理となりました。この時、「急がないから手の空いた時にゆっくりやって」と言いました。修理完了は四月後半となり、地震をやり過ぎしました。これは本尊観世音菩薩が与えてくれた幸運だと思います。

震災余波

墓地の除草には粒剤の「ネコソギ」を、墓地と境内の除草には液体の「ラウンドアップ」を散布しています。噴霧器の単一乾電池が六月上旬まで手に入らず、この状況が続けば「『今年は事情があつて、除草が出来ません』とギブアップの葉書を配ろうか。』」というところまで追い込まれました。幸い、雷電社さんの協力で、急場をしのぐだけの電池が手に入り、七月一日現在では、除草に成功しています。

余談ですが、墓地に砂利を敷くと、かえって草が生えます。墓地の草を抑えているのは、先程の粒剤と清掃による効果が大きいです。砂利面では雨で粒剤が流れ、保持できずに薬効がかなり下がります。加えて、砂利を掃除したことがある人は解ると思いますが、上手く掃けません。そうして、砂利は日光で暖まりやすいです。

「除草剤が少なく、清掃できないので種が多く残り、しかも暖かい」という発芽に最適の条件が3つそろっていますので、土や砂よりも草の発生は多くなります。石屋さんが決して言わない砂利の欠点です。撤去の際は、ご相談下さい。



眞観寺では4月から三ヶ月間は一回100ℓ弱の除草剤を約4500坪の境内に散布します。

これからの課題

眞観寺では様々な幸運から今回の地震では建物に大きな影響を受けませんでした。建物の破壊に貢献する「周期1秒から2秒の揺れ」が少なく、物が落ちる「周期0.5秒から0.2秒の揺れ」が多かったので、眞観寺の建物が無事だったとも言えます。

近年に新築、改修した客殿と仁王門はともかく、築三百年から四百年の本堂と観音堂は「昨日まで安全」でしたが、「明日の安全」は保証の限りではありません。

眞観寺の建物は木造で、木の組み合わせによって成立しています。木組みの「仕口」を守れば、建物の明日の安全につながります。重継は三年前より上の写真の耐震仕口ダンパーによる耐震補強を勉強しています。近くでは川里村の「花久の里」でも一部建物に採用され、今回の地震に大きな効果を発揮したようです。

歴史ある建造物の本堂と観音堂を文化財に指定する運動と共に進めていきたいと考えています。



耐震仕口ダンパー

般若心経講について

般若心経を読んでお唱えできる様に、今年も般若心経講を開催します。初心者向けに息継ぎの場所から始めてゆっくり進めていきたいと思います。興味のある方はご参加下さい。九月に葉書にて改めて案内します。

尚、九月十八日の回は日曜日の開催となります。昨年同様に普段なかなか人に尋ねることの出来ないお焼香の作法や鈴すずの打ち方などを実践しながらお話しします。若い方の参加をお待ちしています。



般若心経講の様子

日程

九月十八日（日曜日）

十月十八日（火曜日）

十一月十八日（金曜日）

十二月十八日（日曜日）

（毎月十八日は観音様の日です）

時間

午前十時より十一時半まで

場所

眞観寺客殿